メディアスエフエム×夢団

釜石の今とこれから

メディアスエフエムが夢団と共に過ごした2日間。
釜石で出会った人・物・事からは
未来へと歩み続ける力強さを感じました。
あの日の教訓がエリアを超えて届きますように…
ここに夢団との交流の記録を綴ります。

阿部さんが書いた直筆のメッセージからは、教訓を次世代に伝えていきたいという強い想いが伝わってきます。

あの日の教訓を、
どのまちにも。

夢団～未来へつなげるONE TEAM～

夢団・阿部素佳さんの回想録

今だから、伝えたい。東日本大震災と、記憶を持たない私の記憶。

震災当日、私は母と二人、海の近くにあった洋服店に買い物に出かけていたそうです。店内で過ごしていると突然電気が消え、その直後、大きな揺れが襲いました。棚から落ちた商品が散乱し、瞬く間に景色が一変。母は、すぐに私を抱えて車に向かうと、文字通り放り込むように私を車に乗せ、高台へ急いだといいます。近くの山にある釜石小学校が避難場所となり、私と母はそこへ逃げ込みました。母の咄嗟の判断のおかげで、私は一命を取り留めたのです。後で聞く話では、その洋服店は、津波で壊滅的な被害を受けたそうです。もしもあの時、少しでも避難が遅れていたら…。私は、“守られた命”なのだと感じました。

避難所には、大勢の人が集まっていました。個々でおにぎりや乾パンを食べ、見知らぬ人同士が同じ空間で昼夜を過ごしていたと聞きます。私には、微かに残る記憶があります。知らない

お婆さんがくれた鈴カステラの甘い味、そして、真っ暗な校舎の中、母の腕に抱かれていた感覚。断片的で曖昧ですが、確かに私の中にある震災の記憶です。

中学校に進学すると、震災について学ぶ機会が増えました。汽車に乗って被災した町や場所を巡る「震災研修」という行事も体験しました。その研修で訪れた「いのちをつなぐ未来館」で津波の映像を見た時、私は不思議な気持ちを覚えました。あれほどの出来事を経験しているはずなのに、自分の中には強烈な恐怖の記憶が残っていなかったのです。語られなければ消えていってしまう「記憶」。時が経ち体験者が減れば、出来事そのものの存在感も薄れていってしまいます。私はこの時それがとても怖いと感じました。最初は遠足のような気持ちで参加した震災研修でしたが、当時の写真を見た瞬間に、私は言葉を失いました。自分が立っているこの地が、かつては大勢の人たちの生活の場であり、そして、あの日、多くの命が失われた場所でもあるということを知ったからです。多くの「記憶」が積み重なった場所に立ち、今生きているのだという実感が、私の中に急激に押し寄せてきて、心が震えたのを覚えています。

私は、震災の記憶を持たない世代です。だからこそ、今まで聞いた話や学んだことを伝え続けたいと思っています。震災を“過去の出来事”にしないために、そして将来、同じような被害にあう人を一人でも減らすために。

夢団での活動は、小さな行動かもしれません。しかし、記憶を繋ぐことは防災に繋がると信じています。私の震災の記憶は、断片的で、誰かから受け取ったものがほとんどですが、それを受け継ぐことに意味があると思っています。あの日の出来事を、その記憶を風化させないために、そして、未来の誰かの命を守るために、震災を経験していない様々な人に届けたいのです。

夢団に聞きたい Q&A

Q「夢団に入ったきっかけは？」
中学校の時の震災研修で津波の恐ろしさを知り、楽しく防災を伝えていけたらと思い入団しました。（2年 阿部素佳さん）

Q「夢団の活動で印象的だったことは？」
海外の方たちに夢団の活動を紹介する機会がありました。外国人にどのように震災のことを伝えるか、慣れない英語でうまく伝わるか心配だったけれど、気持ちを受け止めてくれて嬉しかったです。（3年 高橋美羽さん）

Q「今、一番伝えたいことは？」
率先して避難することが大切！規模が小さい地震だと逃げない人も多いと思うけれど、小さいから津波は来ない訳ではないので、自分の命を一番に考えて、周りを巻き込んで避難してほしいです。（2年 菊池眞暖さん）

Q「東海市の皆さんにひと言」
私は釜石に生まれて良かったと思っています。温かい人たちが多いので、ぜひ一度、釜石に遊びに来てくださいね！（3年 森真心さん）

阿部素佳さん
釜石高校2年生で夢団のメンバー。2010年生まれで、東日本大震災が発生した時は乳児だったという。大震災を経験した最後の世代として、記憶や経験のない次世代に震災の「記憶」を繋ぐために活動している。

夢団が語り部活動にかける想い

2026年3月7日、釜石鵜住居復興スタジアムで行われたラグビーの公式戦。「東日本大震災復興祈念試合」と題されたこの試合は、震災の記憶を次世代へと繋ぎ、ラグビーを通じて被災地がひとつになるために開催されました。舞台となったスタジアムは、鵜住居小学校と釜石東中学校の跡地に建てられた、釜石の復興と希望のシンボルでもあります。

会場を訪れると、夢団のメンバーによる語り部活動の真っ最中。「あなたも逃げて」というメッセージが刻まれた震災祈念碑の前で高校生たちが真摯に言葉を投げかけます。足を止めて彼女たちの話に聞き入る観客の中には、涙を浮かべながら震災当時に思いを馳せる人も見られました。

語り部としてデビューできるのは、夢団の中でも選ばれしメンバーのみだそう。勉強会や原稿作成、リハーサルと、経験を積んでいくといいます。高校生である彼女たち自身に残る震災の記憶はほとんどないけれど、家族や震災経験者に聞いた話に想いをのせて、自分らしい言葉で発信する。それゆえに、聞く人の心にまっすぐに届き、リアルに伝わり繋がっていく…、夢団にしかできない語り部の形です。

この日、語り部のリーダーとして会場に立った森真心さん。父親を津波で亡くした母親の話を聞き、そのリアルな現実に触れたことで当事者意識が芽生えたと話します。

「復興が進んでいく中、震災のあとが段々と薄れていっても、当時の教訓は決して色褪せてほしくないと強く思います。震災から15年、町並みや人々の賑わいが戻りつつあります。これは、多くの人が前を向いて諦めずに復興を行ってきた証だと思います」

と、まっすぐに語る彼女の声は、この日も大勢の心に響いたことでしょう。

一方その頃、スタジアムでは「日本製鉄釜石シーウェイブス」と「花園近鉄ライナーズ」の戦いがより一層の盛り上がりをみせています。客席には、夢団がデザインした応援フラッグが数多くはためき、サポーターたちの応援にもますます熱が入ります。シーウェイブスの勝利にて幕を閉じた復興祈念試合。同じ時間を共有し、皆の心がひとつになったひと時でした。

自分の言葉で伝える等身大のメッセージが聞く人の胸を打つ語り部。

試合の応援フラッグは、釜石のラグビーチーム「日本製鉄釜石シーウェイブス」と夢団がコラボした特別なもの。デザインは夢団のメンバーが担当。

森真心さん
釜石高校3年生で夢団のメンバー。語り部のリーダーとして夢団の記憶を自分の言葉で届け続けている。

日本製鉄釜石シーウェイブス スペシャルインタビュー

桜庭吉彦さん（ゼネラルマネージャー）
河野良太選手（キャプテン）

チーム加入後、震災について改めて知ったことや感じたことは？

震災当時の話は聞いています。先のことや未来のことなんて考えられず、希望も何もないという状況だったそうです。ラグビーをしている場合ではなかったという話も先輩たちから聞きます。震災から15年ですが、まだ日常の生活に戻れてない方々もいると思います。あの頃の記憶は、僕たちもずっと忘れてはいけないと思っています。

発災当時の状況や15年を振り返って感じることは？

ラグビーができるような状況ではなく、我々に何ができるかを考えた時に、ボランティアとして少しでも被災された方の役に立てるように…ということで、支援物資の運搬や避難所にいる子どもたちに、気分転換でラグビーに触れてもらえるようにしました。私自身も発災直後は、本当に復興することができるのか不安でした。皆さんの努力とたくさんのご支援でここまで復興することができたと思っています。鵜住居復興スタジアムは、地元の小中学校が建っていた場所にあります。ワールドカップを開催し、今はリーグワンに所属してここで戦っています。ある意味あっという間の15年でした。

今後、釜石シーウェイブスはどんな存在になっていきたい？

復興祈念試合を通じて、改めて災害が起きる前に準備することを考える機会になればと思います。今回、ラグビーが、地域をひとつにする要素になったと思います。我々はこの地で、地域を元気にしていく、地域がまとまる原動力として、ラグビーに取り組んでいきます。

日本製鉄釜石シーウェイブス

釜石市を拠点とするラグビーユニオンクラブで、ジャパンラグビーリーグワンに所属しています。東日本大震災では、本拠地が甚大な被害を受け、チームとしても復興活動に尽力。復興祈念試合では、夢団とのコラボ応援フラッグがはためく会場で見事勝利し、釜石の皆さんの心をひとつに繋ぎました。